史跡 金山古墳発掘調査概要

1994. 8

河南町教育委員会

第1章　序　説

第1節　金山古墳の位置と周辺の環境　1

第2節　金山古墳に関する既往の調査　4

第3節　調査に至る経過　5

第2章　外部構造

第1節　調査区の設定　5

第2節　墳形及び規模　6

第3節　外表施設　17

第3章　内部構造

第1節　北丘主体部　18

第2節　南丘主体部　24

第4章　まとめ　29

第1章　序説

第1節　金山古墳の位置と周辺の環境

金山古墳は、現在の行政区でいえば大阪府南河内郡河南町大字芹生谷１８５番他に所在する。

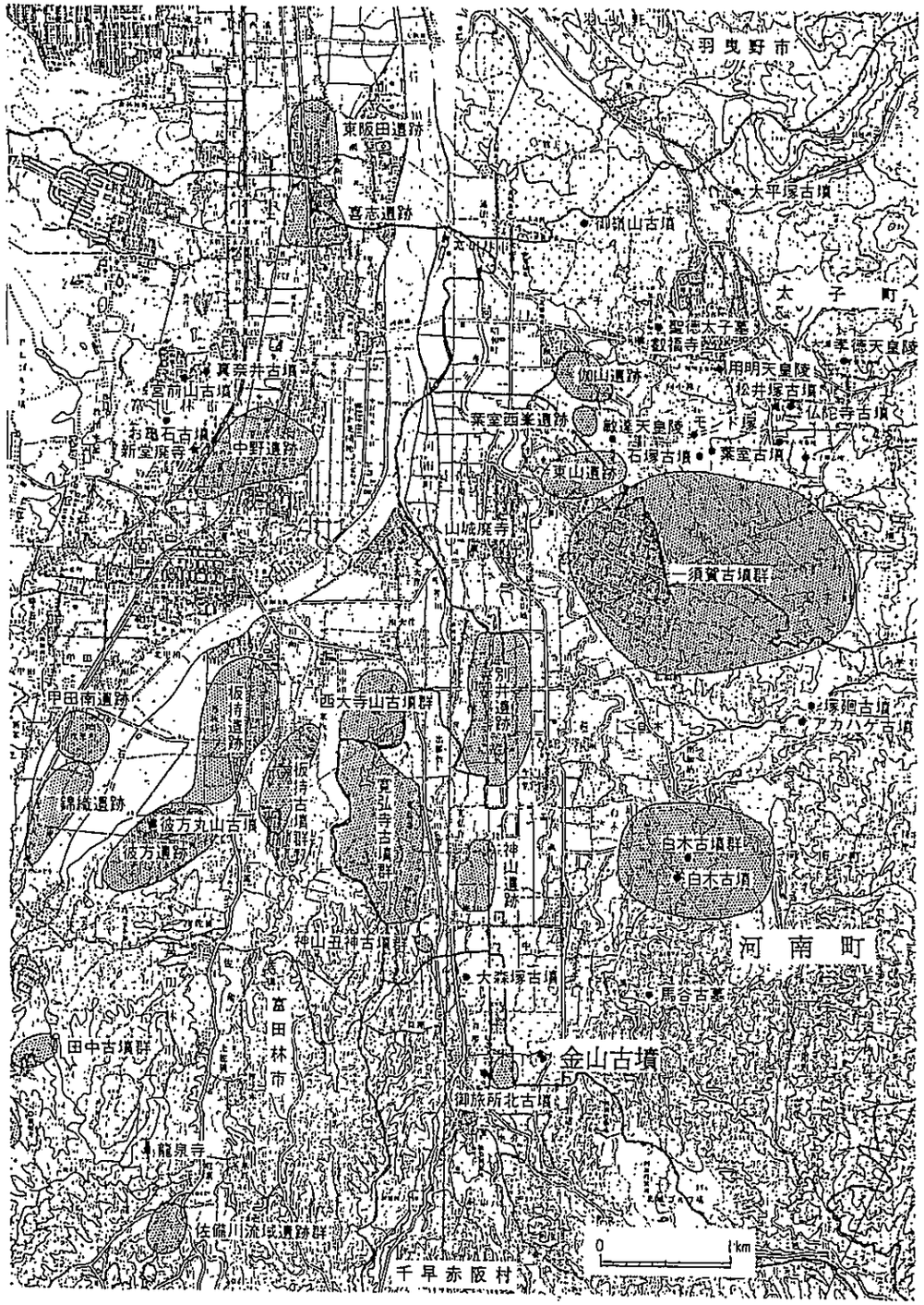
石川の支流の一つである千早川は、河南町の西部を北流してやがて石川へと合流する。葛城山から派生する山塊の西麓には梅川が北流している。千早川と梅川の間は、段丘地形となっており、東西１キロメートル、南北３キロメートルの台地状を呈し、通称河南台地と呼ばれている。金山古墳はこの河南台地の最南端部に位置する。

周囲の微地形をみると、南東から北西に向かって舌状に張り出す小尾根の南西縁辺を利用して古墳が築かれているのがわかる。周囲の標高は１３２メートルを測り、墳丘上からは北方約１０キロメートルにある古市古墳群を一望することができ、選地条件としては絶好の位置を占めるといえよう。

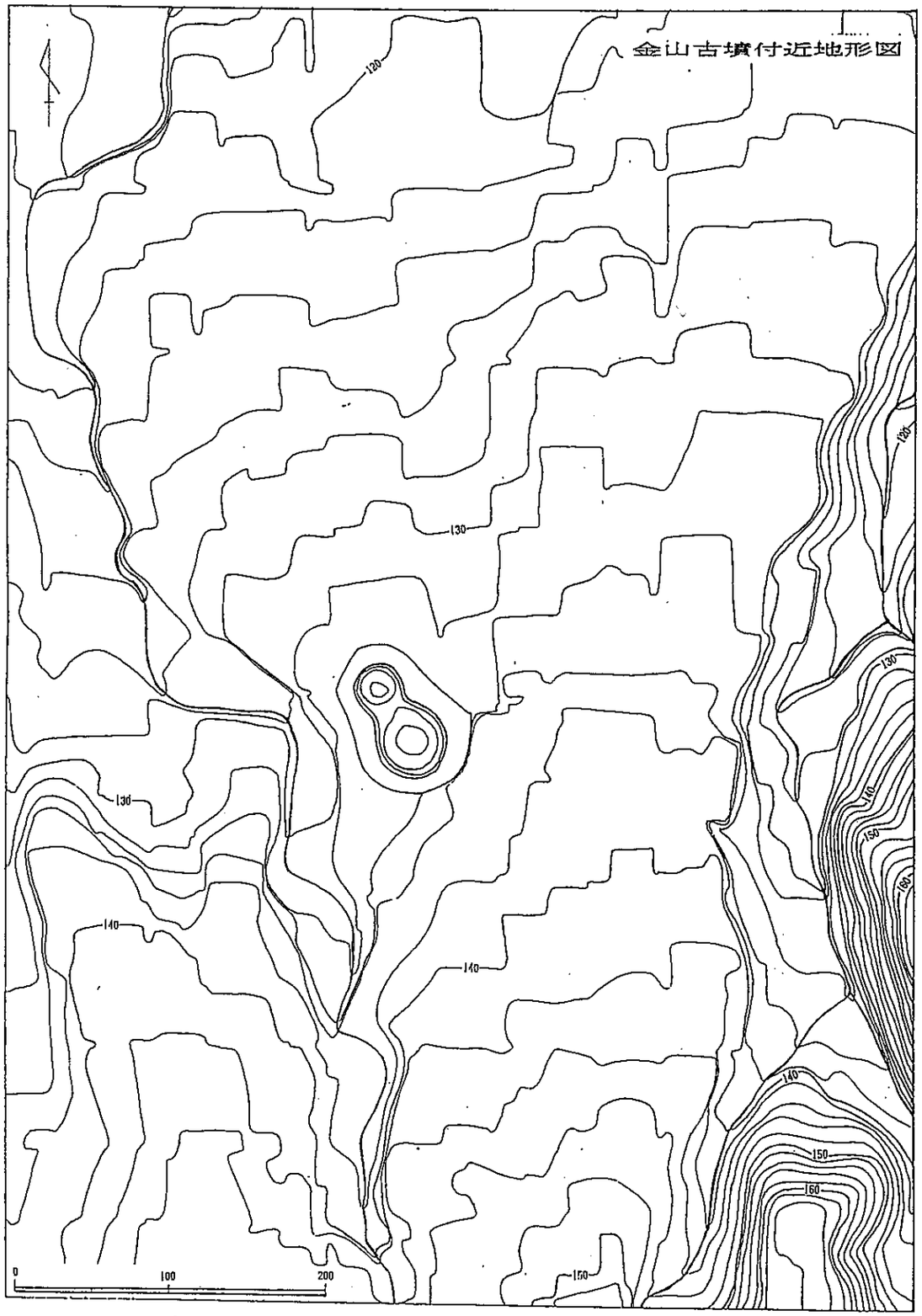
周辺の古墳をみると、北西約1.5キロメートルの千早川対岸の丘陵上に寛弘寺古墳群が存在する。寛弘寺古墳群では古墳時代前期末から終末期にかけての１００基近い古墳が連綿と築かれている。河南町から太子町にかけての丘陵上にある一須賀古墳群やその北方にある磯長谷の古墳群が後期、終末期からなるのに比べて大きな違いがある。寛弘寺古墳群の在地性の強さを物語るものであろう。

また、西南西５００メートルのところに御旅所古墳、御旅所北古墳がある。御旅所古墳の詳細は不明であるが、御旅所北古墳は周囲に濠をめぐらす直径約２８メートルの円墳で、２個の組合せ式石棺を納めた横穴式石室を内部主体とし、出土土器から金山古墳とほぼ同時期の築造であることがわかっている。

一方、古墳時代の集落はあまり明らかになっていない。寛弘寺古墳群と千早川をはさんで対岸にある神山遺跡で５世紀代の竪穴式住居が数棟、寛弘寺遺跡で６世紀代の掘立柱建物が２棟みつかっているにすぎない。



河南町周辺の遺跡分布図（1/50,000）



第２節　金山古墳に関する既往の調査

金山古墳が世に知られることとなったのは、昭和２１年８月に北丘で２個の刳り抜き式家形石棺を蔵した横穴式石室が偶然発見されたことが新聞で報道され、同年９月に小林行雄氏を担当者として、大阪府教育委員会によって調査されたことに始まる。この調査の成果は報告書として公刊されている。その墳丘に関する記述の概要は、次のとおり。

「墳丘は大小二つの円丘を並列して」いる。「ほぼ南北に並ぶ二丘のうち、南方のものは大きく東西径４４.8メートル、高さ8.2メートル、北方のものはやや小さく東西径３０.9メートル、高さ7.2メートルあり」、「長軸長は７７.9メートルあって、ほぼ両丘の直径の和に等しい。南北の両丘には、ともにその表面に葺石の存在が認められる。瓢形に二つの円墳を合した外周には、１２メートル内外の幅をもって、周囲の土地より一段低い水田が封土をとりかこんで巡っていて、あたかも周濠のある前方後円墳のような外観を呈しているのは、両古墳に共通した濠を設けたものと解してよいであろう。」

その際の調査で、北丘石室は既に盗掘を受けていることが判明したが、石室・石棺の内外から銀鐶、瑠璃玉、鉄製帯金具、鉄刀、鉄刀子、鉄鏃、馬具、土師器杯、須恵器高杯・壺などが出土している。

周濠の一部は早くから宅地になっており、戦後すぐ墳丘鞍部に家が建ち、墳丘上も開墾されていたが、旧状をよくとどめており、類例の少ない双円墳ということなどから平成３年２月１５日に国の史跡に指定された。

本町教育委員会では、今後の整備に備え平成３年３月に航空写真測量を、同年６月に北海道と沖縄県を除く各都府県教育委員会の協力を得て全国双円墳分布調査を行った。平成４年２月には電気探査、地中レーダー探査を行った。地中レーダー探査の結果、周濠の形状は明確になったものの、南丘主体部の位置、形状をつかむには至らなかった。

第３節　調査に至る経過

河南町では、自治省の地域づくり推進事業によって、金山古墳を史跡公園として整備することとなり、平成４年１０月に金山古墳環境整備構想策定委員会を発足した。整備計画案を策定するにあたって、整備に必要な基礎資料を得るため、また金山古墳のもつ歴史的意義を再確認するために金山古墳の全容を明らかにすることが必要となり、環境整備構想策定委員会の指導のもと文化庁と協議の上、必要最少限度の発掘調査を実施することとなった。

第２章　　外部構造

第１節　調査区の設定

今回の調査はあくまでも整備のための基礎資料を得るのが目的であり、①墳丘・周濠等各部位の法量、②外表施設、③南北両丘の築造時期差の有無を確認するのを目的として、具体的には次のトレンチを設定した。

まず、南北両丘の推定中心を基準に推定主軸線を設定し、これをもとに各トレンチを設定した。

⑴Ａトレンチ

墳丘主軸線に沿ったトレンチで、墳丘・周濠に関する基本的な法量、構造、特に南北両丘の相互関係を把握するために設定した。

⑵Ｂ・Ｃトレンチ

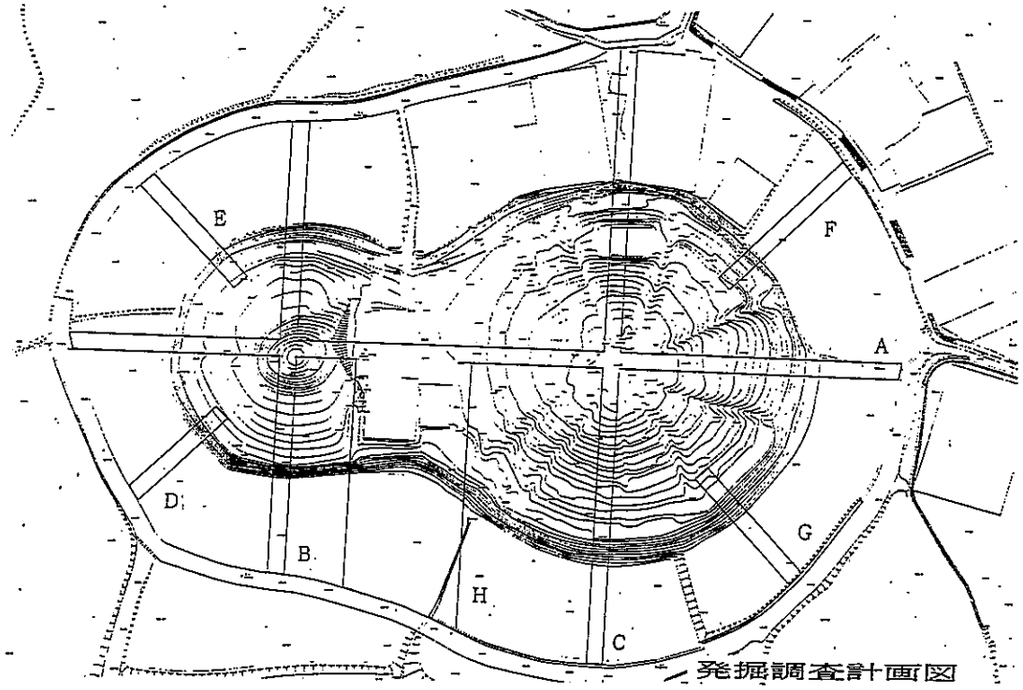
北丘・南丘を横断するトレンチで、両丘の状況を把握するために設定した。

⑶Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇトレンチ

南北両丘中心を基点として、墳丘主軸線に対して４５度の角度で設定し、両丘裾部から周濠にかけての状況を把握する。（Ｅ・Ｆトレンチは未掘削）

⑷Ｈトレンチ

くびれ部の構造、北丘横穴式石室の羨門端部、閉塞石の残存状況、墓道、排水施設を確認するために、くびれ部西側に設定したトレンチ。



発掘調査計画図

第２節　墳形及び規模

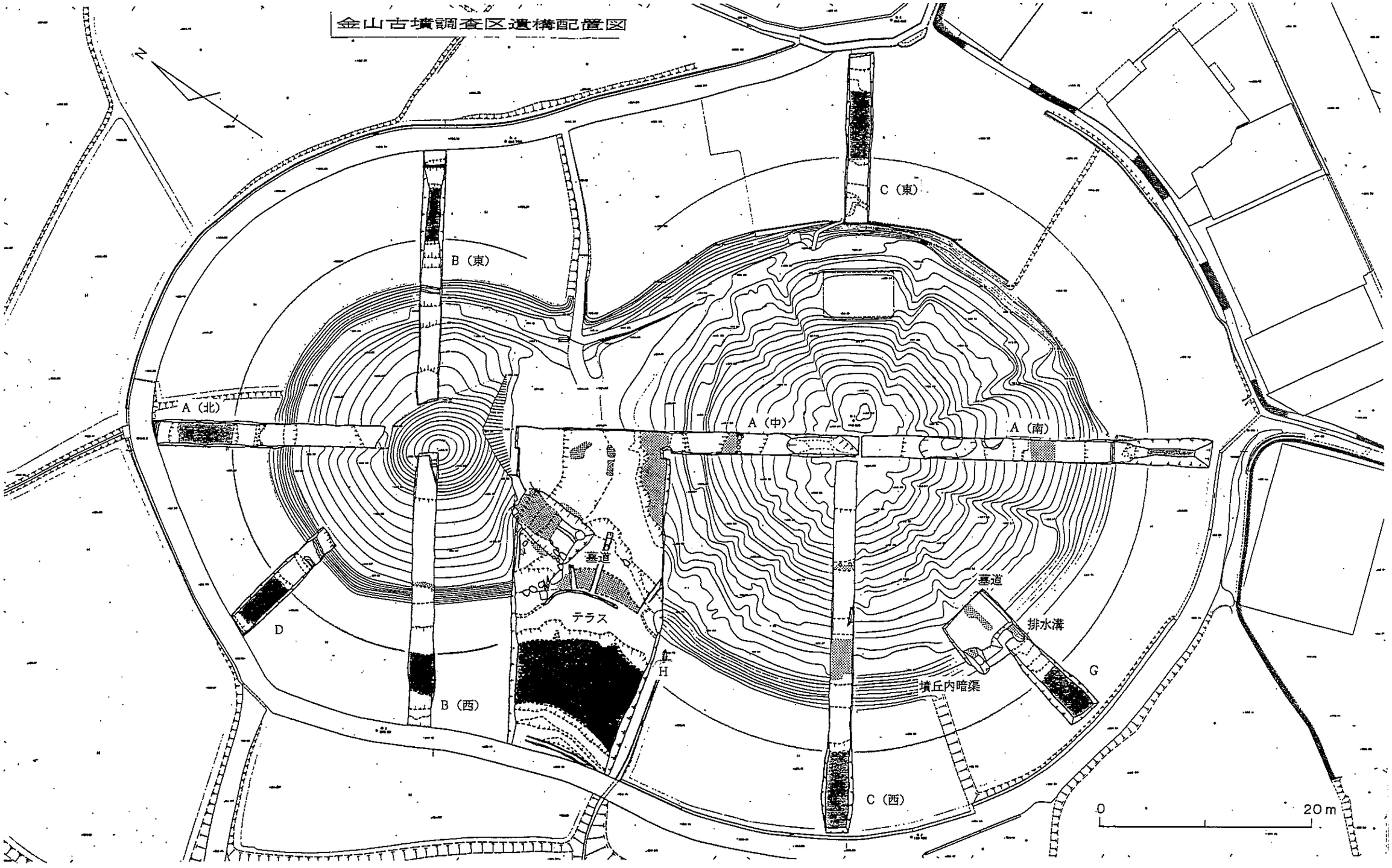
１　周濠

従来から、墳丘にそって巡る水田は周濠のなごりと考えられており、地中レーダー探査でもこれを裏付ける結果もでていたが、今回の調査であらためて墳丘に沿う形の周濠が巡ることが確認できた。

北丘周囲の濠底幅は、Ａトレンチ及びＢトレンチ東側部分で５メートル、Ｄトレンチで４.６メートル、Ｂトレンチ西側部分で３.６から４メートルと西側で幅が狭くなっている。

南丘周囲で濠底幅が確実に検出できたのはＣトレンチ東側部分のみで、濠底の幅は

金山古墳調査区遺構配置図



6.2メートルを測る。Cトレンチ西側部分では確認できた濠底幅は7メートルで、トレンチ端で堤付近と考えられる堆積土が見られたため、8メートル近い幅であると推定できる。

各丘それぞれの周囲で濠底幅が一定せず、北丘西側及び南丘東側で幅を減じているのは、両方ともに谷が近くまで入り込んでいるため、地形に制約を受けたためと考えられる。

いずれの部分も現地表面から濠底までの深さは1.3から1.5メートルを測る。濠底のレベルは南東から北西に向かって緩やかに下がっており、両者の比高は1.3メートルを測る。

2　墳形及び規模

現状の墳丘裾の急傾斜は、後世に削らたものであったが、各トレンチで本来の墳丘基底部を検出することができた。基底部は各円丘中心を基点に描いた円弧上に並ぶ。この結果、本来の墳丘規模は墳長85.8メートル、北丘の直径38.6メートル、南丘の直径は55.4メートルであることが判明した。高さは現在残っている墳丘盛土部分で北丘6.2メートル、南丘8.8メートルを測る。墳丘主軸は33度4分西に偏している。堤の幅等は不明であるが、周濠を含めた主軸長は104メートルと推定できる。

南丘では2段のテラスが確認できたため、墳丘は3段に築かれていることも判明した。北丘では明確なテラスは確認できなかったが、墳丘鞍部の状況から2段築成であったと推定できる。

南丘各段テラスの検出できた最大幅は、下段5.2メートル、上段1.4メートルを測る。各テラスは墳丘外方に向かって1.5度から6度の緩い傾斜をもつ。

南北両丘のテラスは、それぞれ独立して鉢巻き状に巡るが、北丘テラスと南丘下段テラスはくびれ部で接していたようである。

くびれ部西側では、堤より一段低い地山削り出しのテラス状の張り出しが付く。この張り出し状面及び付近の濠内から須恵器子持ち器台・壺が出土している。くびれ部

東側は調査していないため不明であるが、主体部との関係から張り出しは西側だけにある蓋然性が高い。

なお、北丘頂部の急な高まりは、締まりが悪い礫混じりの土で盛られており、後世の盛土であった。

墳丘復元法量表

区分		北丘 直径	北丘 斜面幅	北丘 高さ	北丘 角度	南丘 直径	南丘 斜面幅	南丘 高さ	南丘 角度
3段目	上縁部	——	——	——	——	11.0m	5.0m	2.8m	29°
	基底部	——				21.0m			
テラス	上縁部	——	——	——	——	21.0m	2.0m	0.1m	3°
	基底部	——				25.0m			
2段目	上縁部	11.0m	5.0m	2.8m	29°	25.0m	4.5m	2.8m	32°
	基底部	21.0m				34.0m			
テラス	上縁部	21.0m	5.1m	0.6m	7°	34.0m	6.2m	0.6m	6°
	基底部	31.2m				46.4m			
1段目	上縁部	31.2m	3.7m	3.4m	43°	46.4m	4.5m	3.1m	35°
	基底部	38.6m				55.4m			

高さは　北丘：Bトレンチ（西）での高さ。
南丘：Cトレンチ（西）

3　墳丘の築造

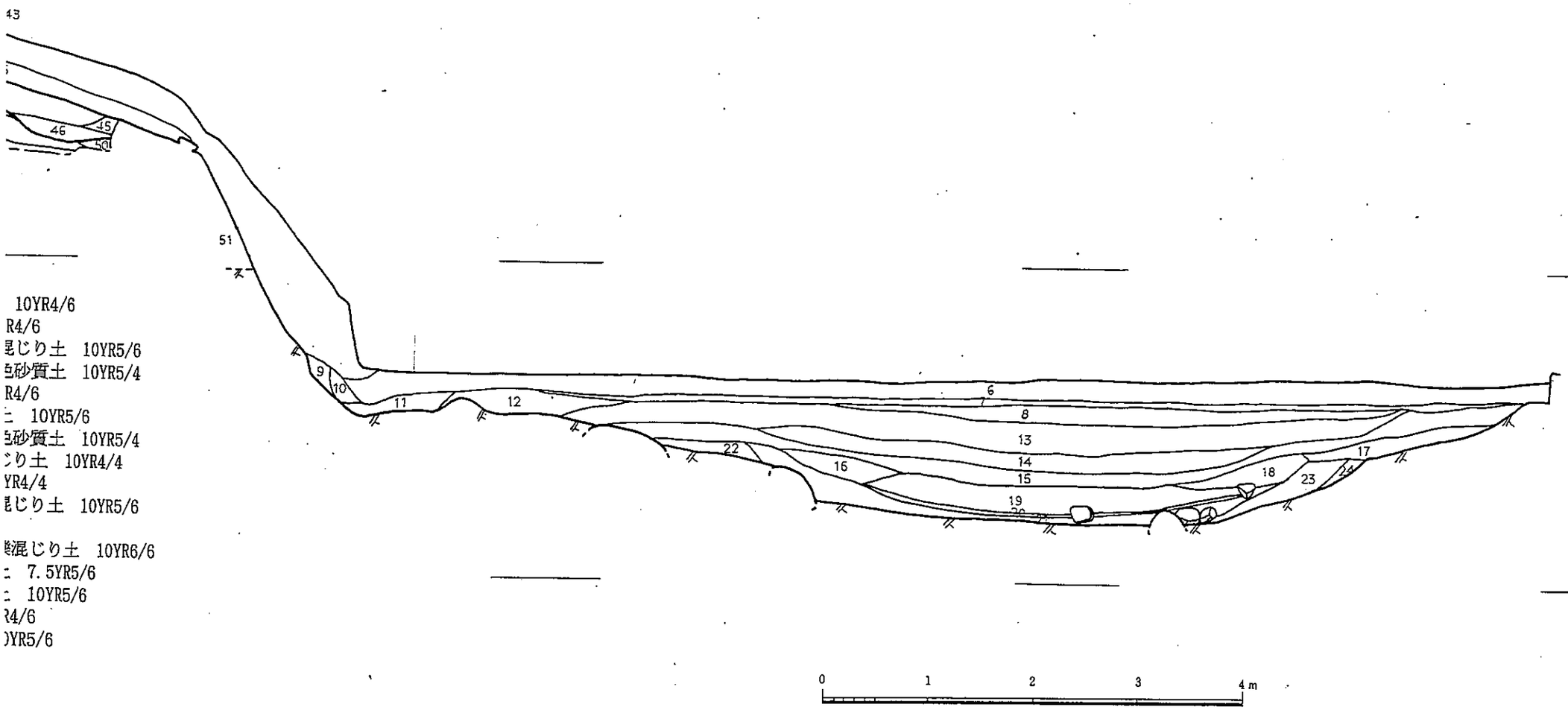
墳丘の築造は、南北両丘とも1段目下半は地山掘り残しで、その上に褐色の粘質土を盛り、さらに黄色の砂礫混じり土を盛っている。

南丘2・3段目は、基底部付近では粘質土と砂質土の互層がみられ、比較的良く締まっているが、それ以上は砂礫混じりの土で一気に盛っているようで締まりは良くない。この砂礫混じりの土は周濠の掘削土である可能性が高い。北丘2段目も、同様の盛土状況が観察できる。

両丘ともに1段目下半は地山削り出しで、先にどちらかの墳丘を築きまわりを削って整形した様子は観察できない。また、地山上の盛土の状況が両丘ともに酷似することから、両丘には先後関係はなく、最初から双円形に築き、同一の濠で囲む計画性を

W

136

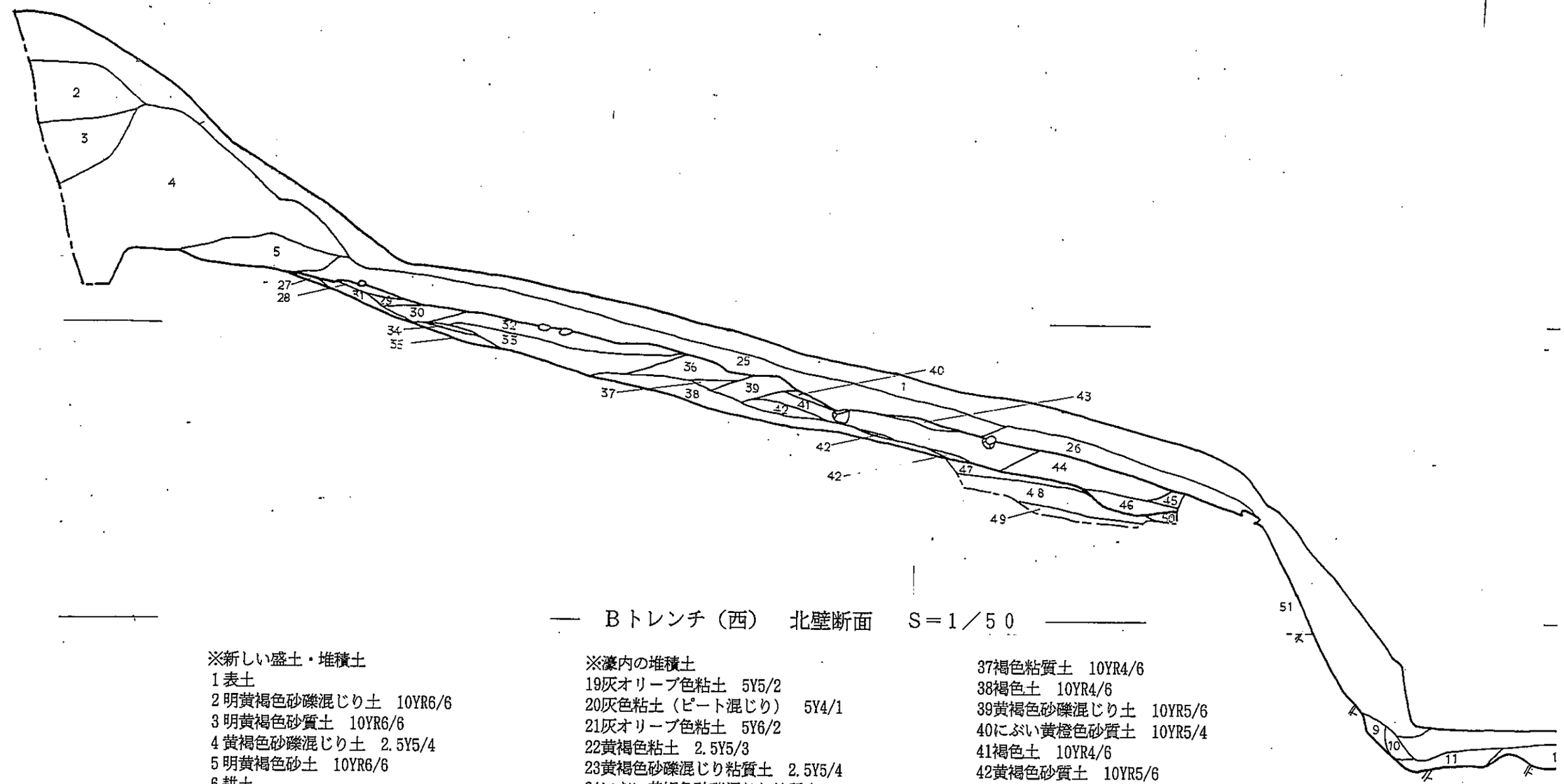


10YR4/6
R4/6
混じり土　10YR5/6
色砂質土　10YR5/4
R4/6
土　10YR5/6
色砂質土　10YR5/4
じり土　10YR4/4
YR4/4
混じり土　10YR5/6

混じり土　10YR6/6
土　7.5YR5/6
土　10YR5/6
R4/6
0YR5/6

130

11 — 12



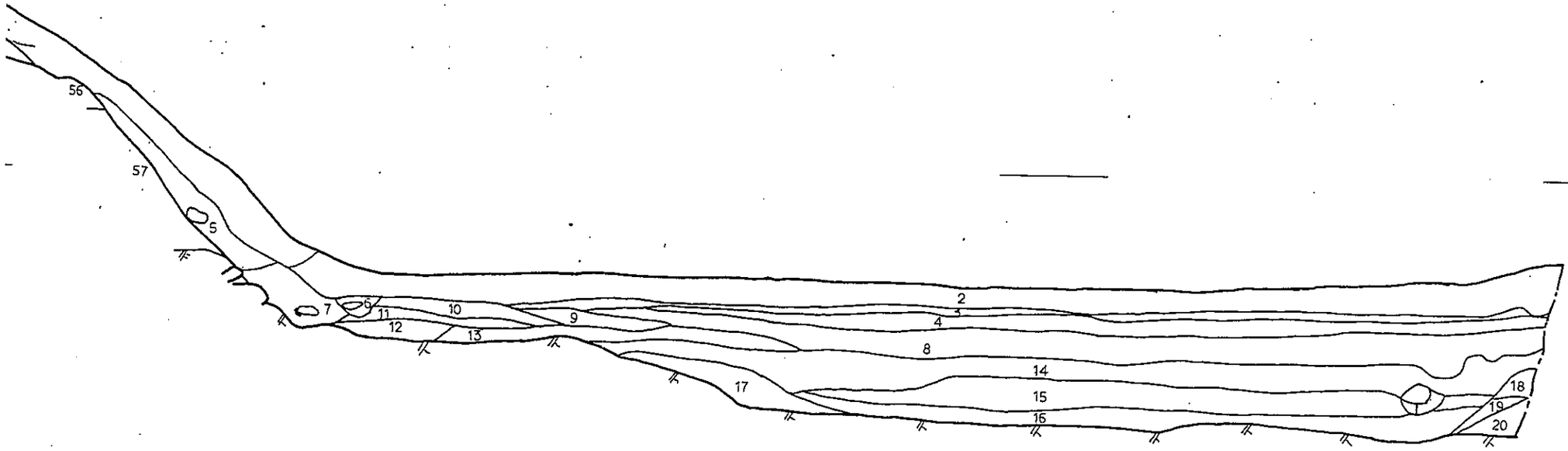
Bトレンチ（西）　北壁断面　S＝1／50

※新しい盛土・堆積土
1表土
2明黄褐色砂礫混じり土　10YR6/6
3明黄褐色砂質土　10YR6/6
4黄褐色砂礫混じり土　2.5Y5/4
5明黄褐色砂土　10YR6/6
6耕土
7床土
8灰オリーブ色砂土　5Y4/2
9にぶい黄色砂　2.5Y6/4
10にぶい黄色粘土　2.5Y6/3
11オリーブ灰色粘土　10Y4/2
12灰オリーブ色粘質土　5Y5/2
※中世の包含層（整地層）
13オリーブ褐色砂礫混じり粘質土　2.5Y4/3
14灰黄色砂礫混じり粘土　10YR4/2
15灰オリーブ色砂礫混じり粘土　7.5Y5/2
16灰オリーブ色砂礫混じり粘質土　5Y4/2
17暗灰黄色砂礫混じり粘質土　2.5Y4/2
18黄灰色砂礫土　2.5Y4/2

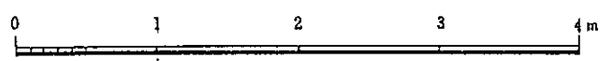
※濠内の堆積土
19灰オリーブ色粘土　5Y5/2
20灰色粘土（ピート混じり）　5Y4/1
21灰オリーブ色粘土　5Y6/2
22黄褐色粘土　2.5Y5/3
23黄褐色砂礫混じり粘質土　2.5Y5/4
24にぶい黄褐色砂礫混じり粘質土　10YR5/3
※墳丘盛土の流出土
25褐色粘質土　10YR4/6
26にぶい黄褐色土　10YR5/4
27明黄褐色粘質土　10YR6/6
28明黄褐色砂礫土　10YR6/6
29褐色土　10YR4/6
30明黄褐色砂礫土　10YR6/8
31黄褐色土　10YR5/6
32黄褐色砂礫土　10YR5/6
33黄褐色土　10YR5/6
34明黄褐色砂質土　10YR6/6
35黄褐色粘質土　10YR5/6
36明黄褐色砂質土　10YR6/6
37褐色粘質土　10YR4/6
38褐色土　10YR4/6
39黄褐色砂礫混じり土　10YR5/6
40にぶい黄橙色砂質土　10YR5/4
41褐色土　10YR4/6
42黄褐色砂質土　10YR5/6
43にぶい黄橙色砂質土　10YR5/4
44褐色砂礫混じり土　10YR4/4
45褐色土　7.5YR4/4
46黄褐色砂礫混じり土　10YR5/6
※墳丘盛土
47明黄褐色砂礫混じり土　10YR6/6
48明褐色砂礫土　7.5YR5/6
49黄褐色粘質土　10YR5/6
50褐色土　10YR4/6
51黄褐色土　10YR5/6

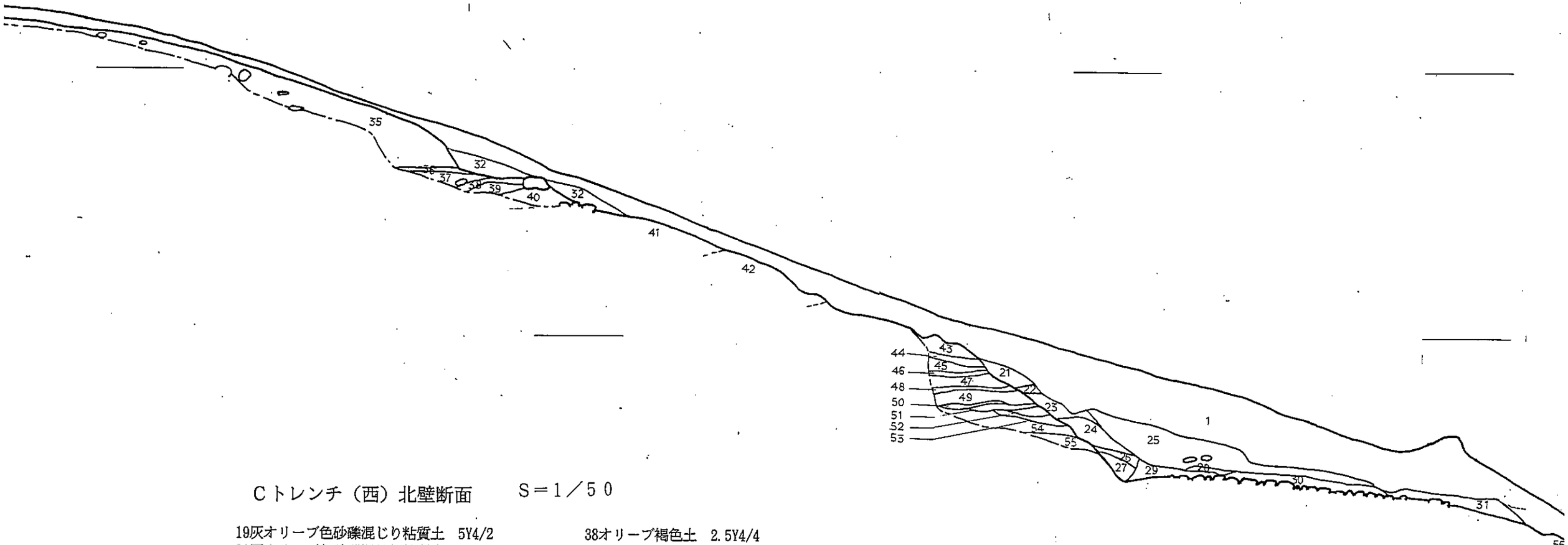
W

136



130



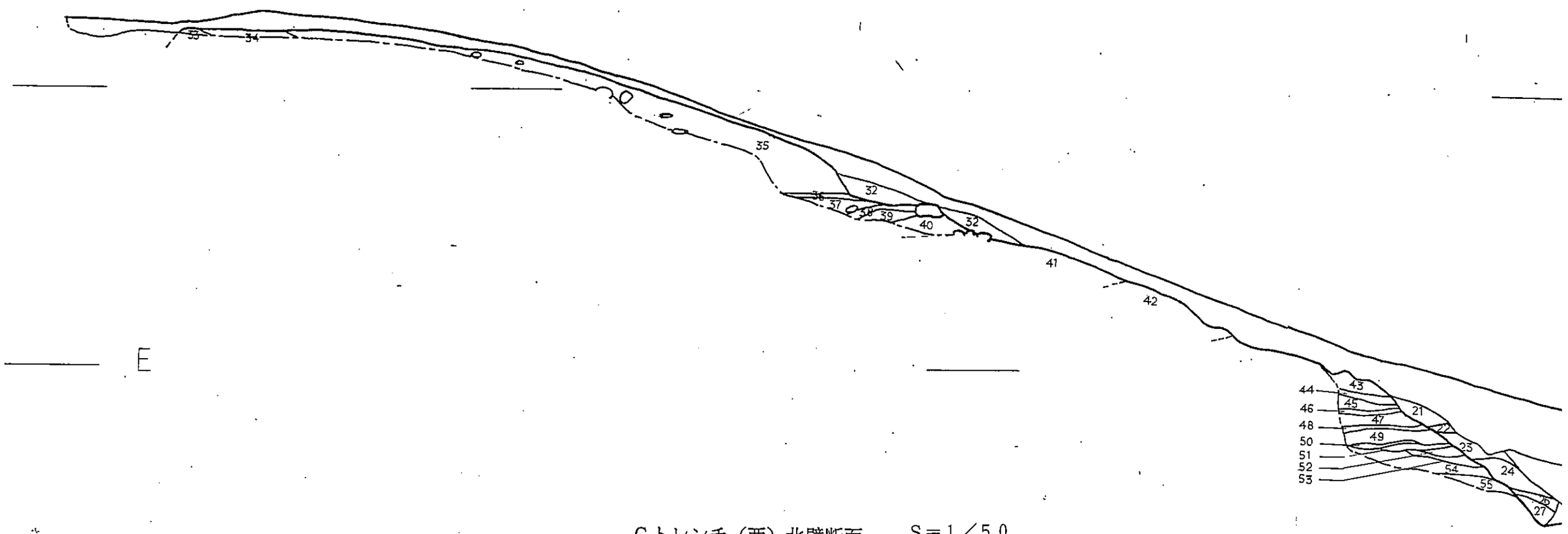


Ｃトレンチ（西）北壁断面　　Ｓ＝１／５０

19灰オリーブ色砂礫混じり粘質土　5Y4/2
20灰オリーブ色砂礫混じり粘質土　7.5Y6/2
※墳丘盛土の流出土
21褐色砂礫混じり粘質土　10YR4/4
22黄褐色砂礫混じり粘質土　10YR5/6
23黄褐色土　10YR5/6
24褐色砂礫混じり土　10YR4/4
25黄褐色粘質土　10YR5/6
26にぶい黄褐色砂礫土　10YR5/4
27オリーブ褐色砂礫混じり粘質土　2.5Y4/3
28明褐色砂礫土　7.5YR5/6
29にぶい黄褐色土　10YR4/3
30褐色砂礫混じり土　10YR4/6
31褐色砂礫混じり土　10YR4/4
32オリーブ褐色砂礫混じり土　2.5Y4/3
※墳丘盛土
33黄褐色砂礫土　10YR5/6
34明褐色砂土　7.5YR5/6
35明黄褐色砂礫土　10YR6/6
36暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3
37黄褐色砂礫土　10YR5/6
38オリーブ褐色土　2.5Y4/4
39黄褐色砂礫土　10YR5/6
40褐色土　10YR4/4
41褐色砂礫混じり土　10YR4/6
42明褐色砂礫土　7.5YR5/6
43黄褐色砂礫混じり土　10YR5/6
44にぶい黄褐色砂礫混じり粘質土　10YR5/4
45黄褐色粘質土　10YR5/6
46にぶい黄褐色砂礫混じり粘土　10YR5/4
47にぶい黄褐色粘土　10YR5/4
48黄褐色粘土　2.5Y5/4
49明黄褐色粘土　10YR6/6
50オリーブ褐色砂混じり粘質土　2.5Y4/4
51黄褐色粘質土　10YR5/6
52黄褐色粘土　2.5Y5/4
53黄褐色砂礫混じり粘質土　10YR5/6
54黄褐色粘土　2.5Y5/4
55黄褐色砂礫混じり粘質土　10YR5/6
56黄褐色砂礫混じり土　10YR5/6
57褐色粘質土　10YR4/6

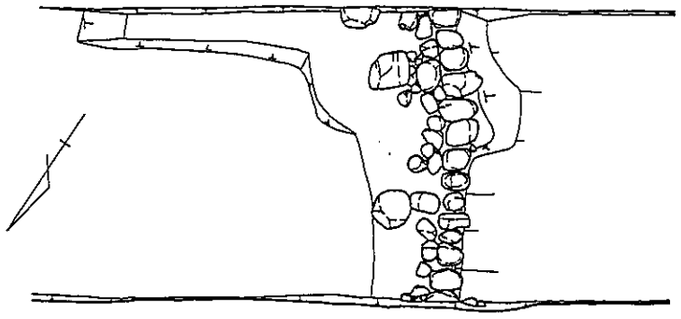
礫混じり土　7.5Y5/2
4/6
砂礫混じり粘質土　5Y4/2
質土　5Y4/3
（整地層）
じり粘質土　2.5Y5/3
砂礫混じり粘質土　7.5Y5/2
粘質土　5Y6/2
礫混じり粘質土　5Y5/3
礫土　2.5Y6/2
粘土　5Y5/3
礫混じり粘質土　5Y5/2

（ピート混じり）　2.5Y5/2
粘土（ピート多い）　7.5Y2/2
粘質土　7.5Y5/2
土　10Y5/1

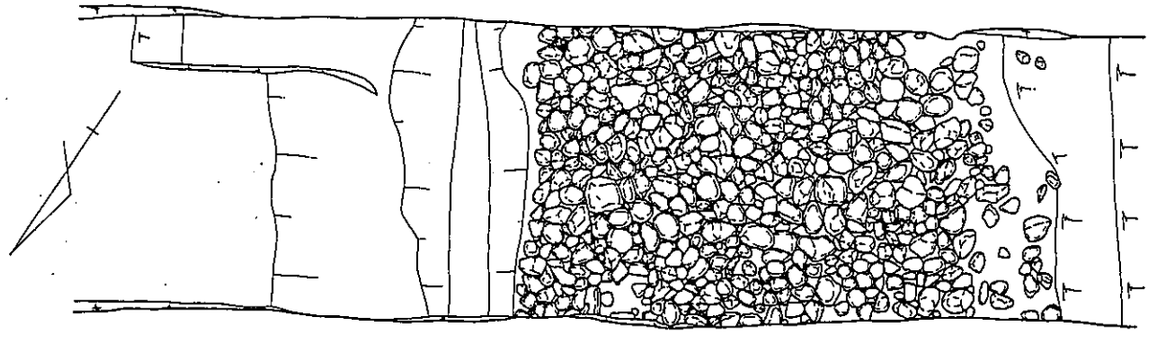


Cトレンチ（西）北壁断面　　S＝1／50

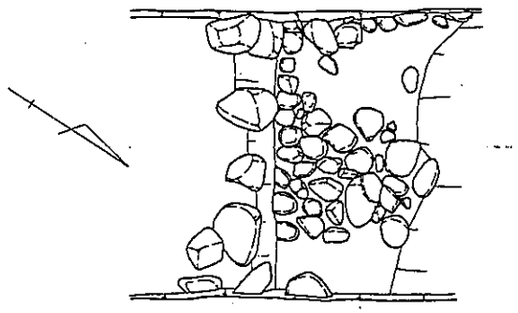
※新しい堆積土
1表土
2耕土
3床土
4灰オリーブ砂礫混じり土　7.5Y5/2
5褐色土　10YR4/6
6灰オリーブ色砂礫混じり粘質土　5Y4/2
7暗オリーブ粘質土　5Y4/3
※中世の包含層（整地層）
8黄褐色砂礫混じり粘質土　2.5Y5/3
9灰オリーブ色砂礫混じり粘質土　7.5Y5/2
10灰オリーブ色粘質土　5Y6/2
11灰オリーブ砂礫混じり粘質土　5Y5/3
12灰黄色粘質砂礫土 2.5Y6/2
13灰オリーブ色粘土　5Y5/3
14灰オリーブ砂礫混じり粘質土　5Y5/2
※濠内の堆積土
15暗灰黄色粘土（ピート混じり）　2.5Y5/2
16オリーブ黒色粘土（ピート多い）　7.5Y2/2
17灰オリーブ色粘質土　7.5Y5/2
18灰色粘質砂礫土　10Y5/1
19灰オリーブ色砂礫混じり粘質土　5Y4/2
20灰オリーブ色砂礫混じり粘質土　7.5Y6/2
※墳丘盛土の流出土
21褐色砂礫混じり粘質土　10YR4/4
22黄褐色砂礫混じり粘質土　10YR5/6
23黄褐色土　10YR5/6
24褐色砂礫混じり土　10YR4/4
25黄褐色粘質土　10YR5/6
26にぶい黄褐色砂礫土　10YR5/4
27オリーブ褐色砂礫混じり粘質土　2.5Y4/3
28明褐色砂礫土　7.5YR5/6
29にぶい黄褐色土　10YR4/3
30褐色砂礫混じり土　10YR4/6
31褐色砂礫混じり土　10YR4/4
32オリーブ褐色砂礫混じり土　2.5Y4/3
※墳丘盛土
33黄褐色砂礫土　10YR5/6
34明褐色砂土　7.5YR5/6
35明黄褐色砂礫土　10YR6/6
36暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3
37黄褐色砂礫土　10YR5/6
38オリーブ褐色土　2.5Y4/4
39黄褐色砂礫土　10YR5/6
40褐色土　10YR4/4
41褐色砂礫混じり土　10YR4/6
42明褐色砂礫土　7.5YR5/6
43黄褐色砂礫混じり土　10YR5/6
44にぶい黄褐色砂礫混じり粘質土　10YR5/4
45黄褐色粘質土　10YR5/6
46にぶい黄褐色砂礫混じり粘土　10YR5/4
47にぶい黄褐色粘土　10YR5/4
48黄褐色粘土　2.5Y5/4
49明黄褐色粘土　10YR6/6
50オリーブ褐色砂混じり粘質土　2.5Y4/4
51黄褐色粘質土　10YR5/6
52黄褐色粘土　2.5Y5/4
53黄褐色砂礫混じり粘質土　10YR5/6
54黄褐色粘土　2.5Y5/4
55黄褐色砂礫混じり粘質土　10YR5/6
56黄褐色砂礫混じり土　10YR5/6
57褐色粘質土　10YR4/6



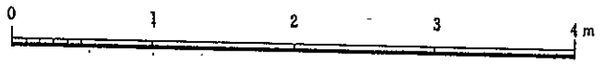
Cトレンチ（西）　上段テラス敷石実測図　　S＝1／5 0



Cトレンチ（西）　下段テラス敷石実測図　　S＝1／5 0



Aトレンチ（中）　上段テラス敷石実測図　　S＝1／5 0



もっていたといえよう。

第３節　外表施設

墳丘表面には石が多く見られるため、これまでは墳丘斜面は葺石で覆われていたと考えられていたが、くびれ部西側の斜面を除いて葺石はなかった。

この葺石は、墓道を埋め戻しくびれ部を整形した後の斜面に施されたもので、１０から４０センチメートルの河原石を葺いている。大きさも不揃いで、やや乱雑に葺いている感じである。また、根石や区画石はみられない。

その他の斜面には葺石はなかったが、南丘テラスには敷石が良好に残っていた。敷石は１０から２５センチメートルの河原石を平らな面を上むけるようにしてびっしりと敷いている。下段テラスでは墳丘中心に向かって目地がとおるところがあり、まずこの区画石を敷き、その間を埋めるように石を敷いていった様子が窺える。

南丘３段目の裾には外護列石が巡らされている。外護列石は３０から４０センチメートルの石を、１０から２０センチメートルの間隔をあけて、敷石にやや被さるように２段積んでいる。

南丘墳頂部に幅約５メートル、深さ1.5メートルのすり鉢状の攪乱壙があり、大量の石が掘り込まれていた。このため墳頂部の平坦面にも敷石が施されていたものと推測できる。

北丘では残りは悪かったが、墳丘鞍部や墓道の肩部で部分的に敷石が確認できたため、南丘同様テラスに敷石が施されていたと推定できる。

くびれ部張り出し上面にも敷石が認められる。１０センチメートル程度の石を敷いているが、残りが悪く区画石有無等詳細は不明である。

なお、今回の調査で埴輪は一点も出土していないため、埴輪は使用されていなかったといえる。

第３章　　内部構造

第１節　北丘主体部

昭和２１年の調査時に、すでに北丘横穴式石室内は調査されているので、今回の調査では石室内は再実測にとどめ、墳丘鞍部に建っていた民家下にありこれまで不明であった羨門端部、閉塞石の残存状況、墓道、排水施設の確認を課題とした。

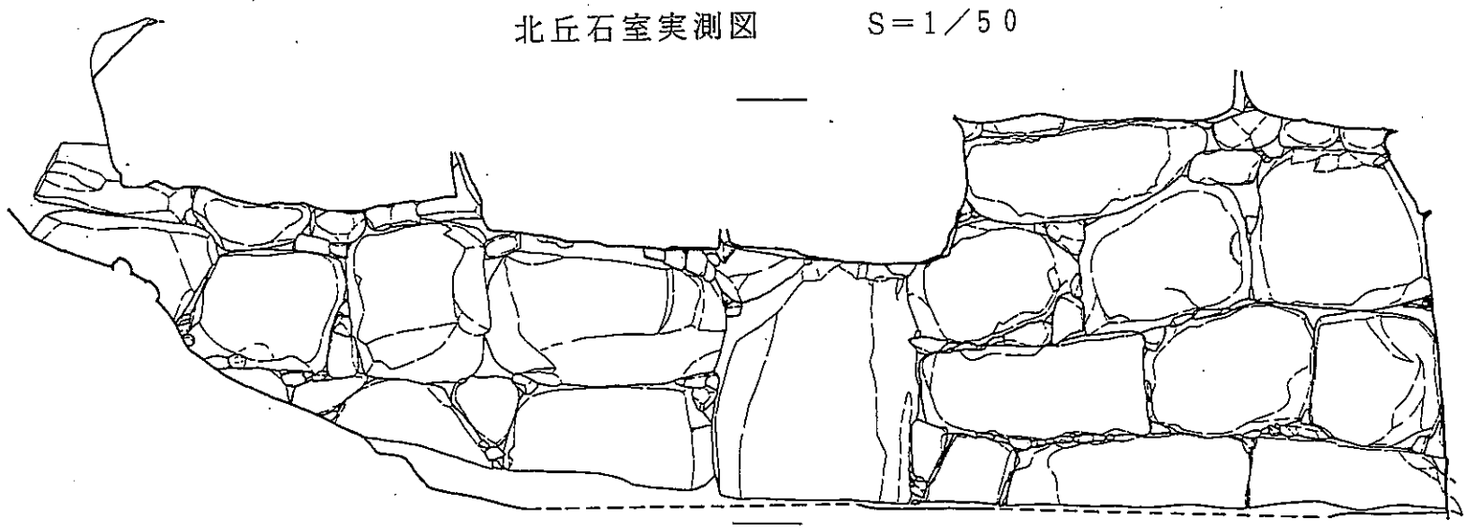
１　石室

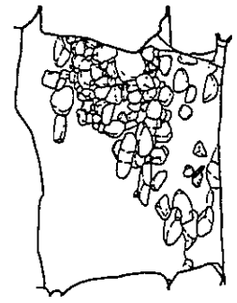
北丘の石室は、奥壁が墳丘中心部に位置するように築かれた両袖式の横穴式石室である。

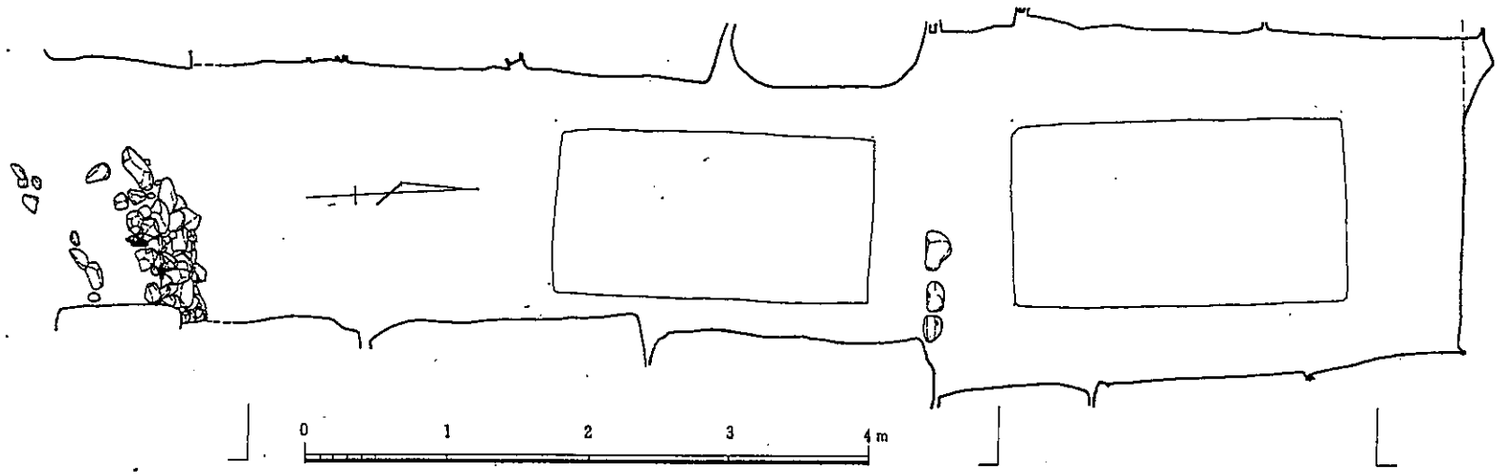
石室の測りうる全長は１０.08 メートルで、玄室長３.83 メートル、羨道長６.25 メートルを測る。幅は玄室奥部で2.20 メートル、玄門よりで2.54 メートル、また高さは玄室2.80 メートル、羨道で1.91 メートルを測る。高さは流入した土砂があるため、この数値より若干高くなるであろう。ちなみに昭和２１年調査時の数値は、玄室高2.84 メートル、羨道高1.94 メートルである。なお、前回の調査時に確認された玄室と羨道を区画する石列は一部顔を出しているだけであり、玄室床面は羨道床面に比べて１０センチメートル高くなっているとの記述についても、流入土のため現状では確認できない。また、石室全長については羨門下部が確認されていないが、後述するように羨門前面に閉塞がなされているため、下部が突出する補助側壁がない限り１０.08 メートルを大きく超えることはない。

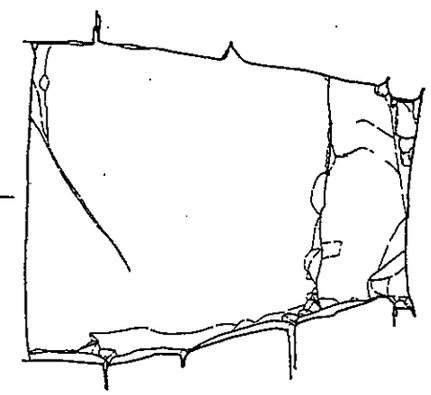
石室の構築であるが、玄室奥壁は一枚の巨石を垂直近くに置き、その上に長方形の石を内側に持ち送るようにと２段に積まれている。側壁は両方とも４段積みであるが、東側壁各段の石数は、下から３石、３石、４石、３石、西側は３石、３石、３石、２石とその構成を異にする。なお、東側壁玄門寄りの２・３段目は１石を共有する。羨道は両壁とも基本的に２段積みである。天井石は、玄室２石、羨道３石である。羨道天井のレベルは、入口に向かって上がっていく。

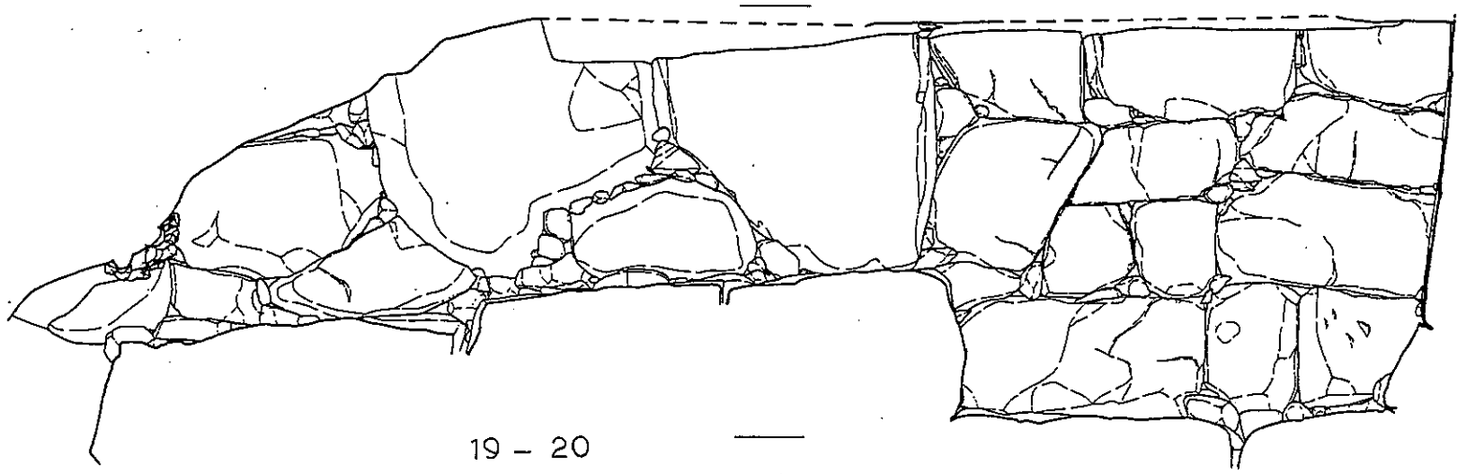
北丘石室実測図　　S＝1／50

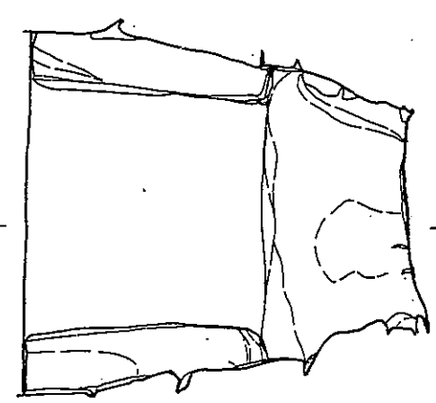












2　墓道

Hトレンチで表土及びその下の新しい堆積土を除去したところで、くびれ部西側へつづく墓道を検出することができた。

墓道を掘削したのは、石室開口部から約７メートルのところまでである。断面は逆台形を呈し、幅は上面で４.2メートル、底で2.5メートル、また深さは2.5メートルを測る。掘削した部分の底のレベルはほぼ水平で、石室床面より１５センチメートル低くなっている。未掘削の部分の東側肩は南丘裾へとゆるやかな弧を描きながらのびるが、西側の肩はくびれ部張り出しへとラッパ状に開く。底のレベルも南及び西に向かってゆるやかに下がり、張り出し上面へとつづく。

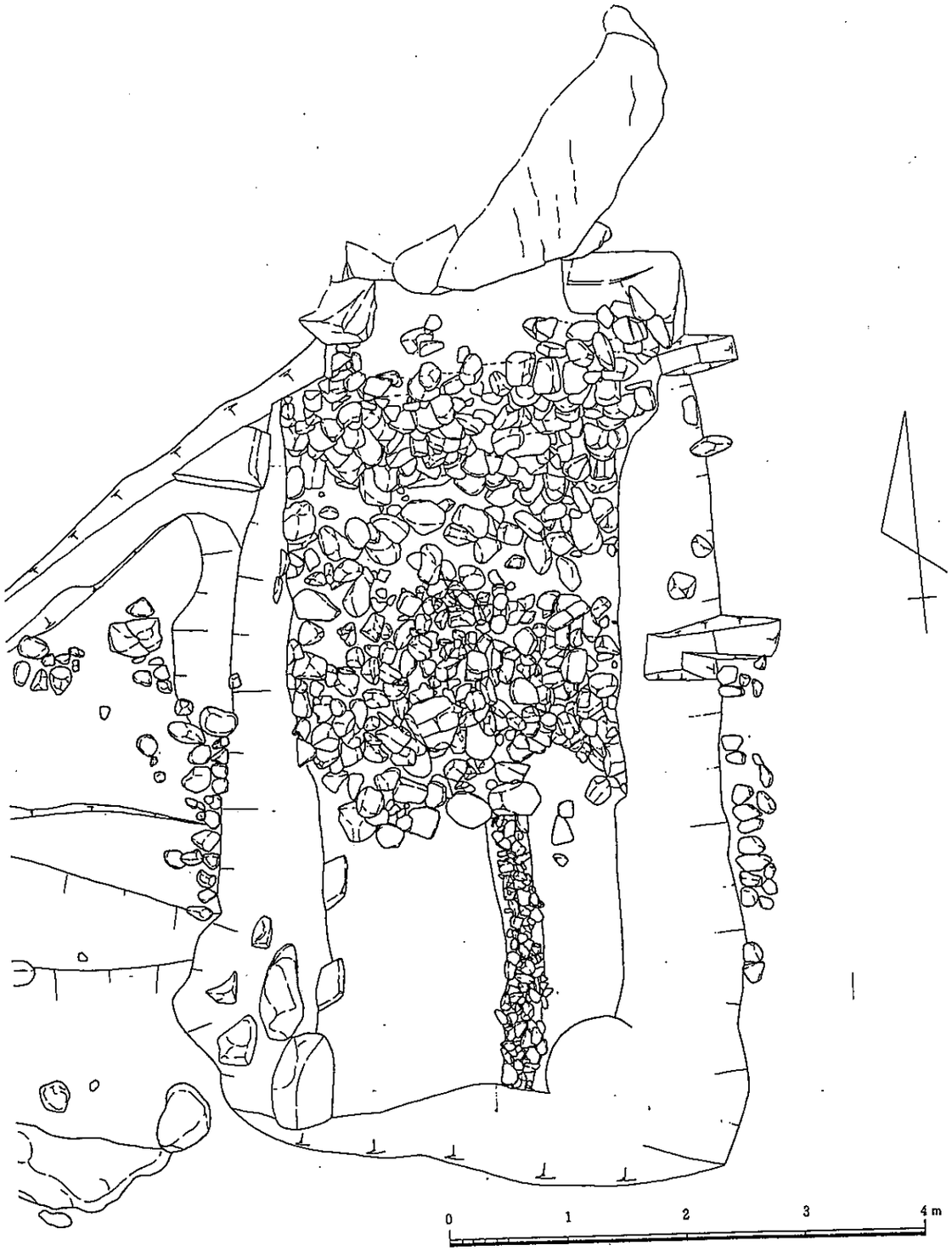
墓道東側斜面下部は地山であるが、その上層及び西側斜面は粘質土と砂質土の互層が観察でき、この層及び地山を切り込んで墓道を掘削している。この層は後述するように南丘墓道でも確認でき、①１回目の埋葬後の墓道埋土、②石室裏込め土の続き、③墓道斜面が崩れないように積まれた層と３つの可能性が考えられる。この内①については、層位的にテラス敷石に先行し、地山の残り具合から１回目埋葬時の墓道断面が左右対象にならず、幅もかなり広くなるため現在のところ②あるいは③と考えておきたい。

墓道内部は、石室閉塞後、褐色粘質土でていねいに埋め戻され、くびれ部を整形し最後に斜面を葺石で覆っている。葺石があるのはこの斜面のみである。なお、テラスの敷石は墓道肩部で止まっており、墓道を埋め戻した後の平坦面には敷かれていない。

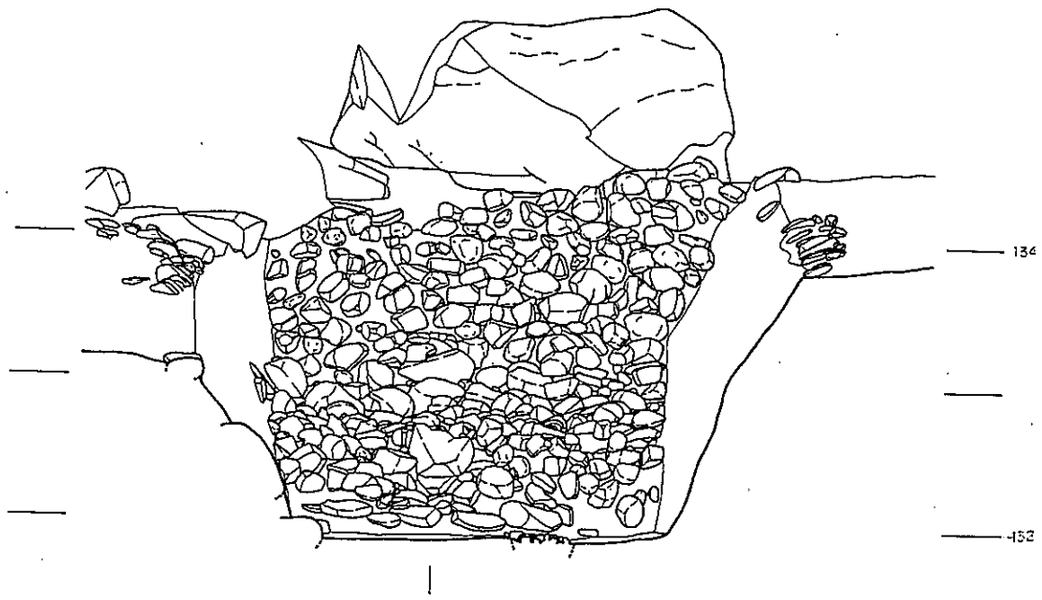
墓道埋土中に、炭が混じる層があり、埋める途中で小さな焚き火程度の火を燃やした可能性がある。その他、埋土内には１０から３０センチメートルの石が少し含まれる。遺物はサヌカイト片に混じって数点の石鏃が出土している他、上層で若干の須恵器片が出土しているに過ぎない。

3　閉塞施設

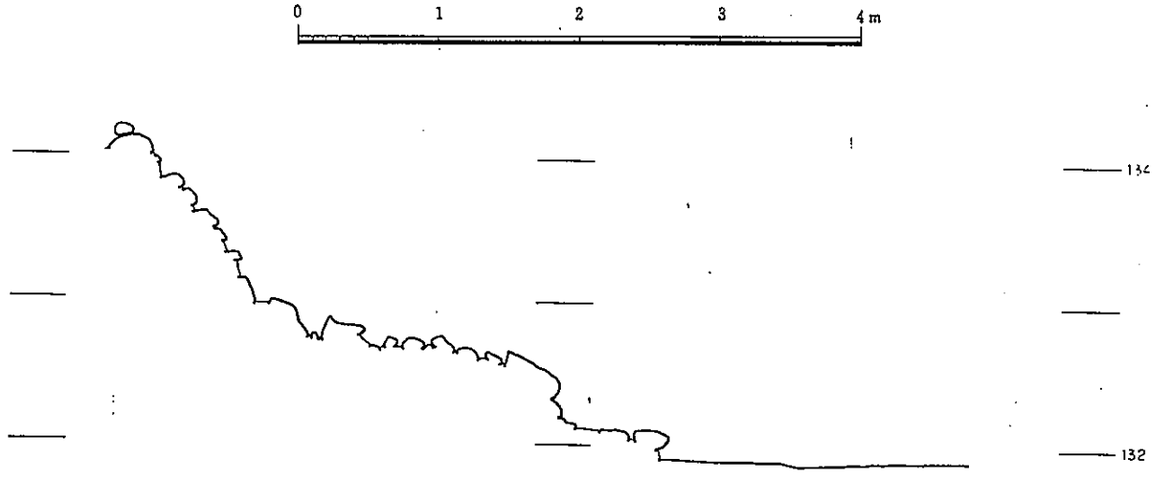
墓道埋土を除去したところ、閉塞施設がほぼ完全な形で残っていた。横穴式石室で



北丘墓道平面図　　S＝1／５０



北丘墓道立面図　　S＝1／50



北丘墓道断面図　　S＝1／50

は、通常羨道部で閉塞を行うが、羨道に石棺を埋葬している関係からか、金山古墳では羨門付近から墓道にかけて、石室前面を覆うように行っている。閉塞施設は奥行き約5.5メートル、高さ現状で2.7メートル、当初は3メートル以上あったと考えられる巨大な構造物である。

閉塞は２０から４０センチメートルの石を一旦７０から８０センチメートルの高さに積み、さらに石室入口付近を急傾斜に完全に塞ぐ高さまでと２段に積まれている。下段は石の大きさや形が不揃いであるが、上段は下段に比べて石の大きさや形を揃えている。羨門付近内部で観察できる閉塞石は、5から３０センチメートルでやや小ぶりの石が多いため、羨門部付近を境に内側と外側を別に積んでいる様相が窺える。

4　排水溝

墓道底で北丘石室からつづく排水溝が検出できた。排水溝は幅３５センチメートルで、墓道底中心からやや東よりに掘られている。蓋石はなく、内部は１０から１５センチメートルの石で充填されている。掘削していないため、深さ及び断面の形状は不明である。

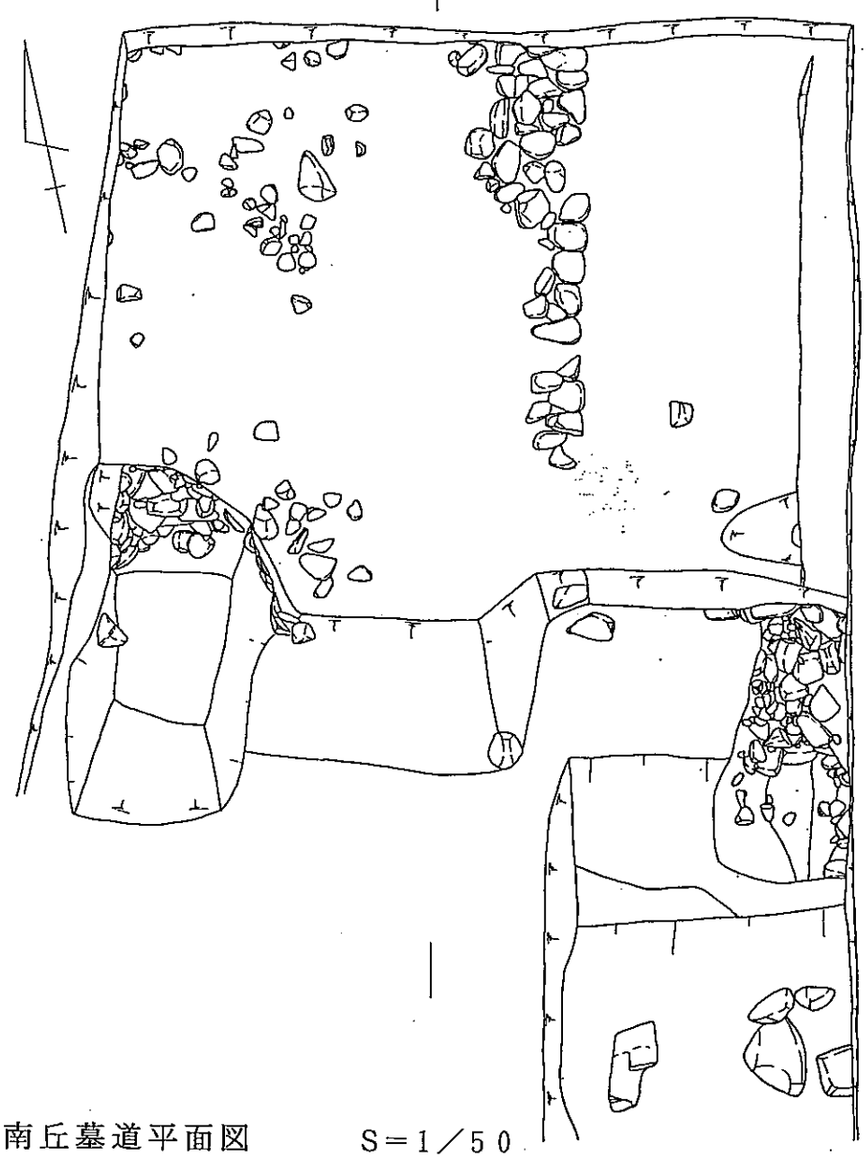
排水溝の末端は確認されていないが、くびれ部へと屈曲していくようである。

第２節　南丘主体部

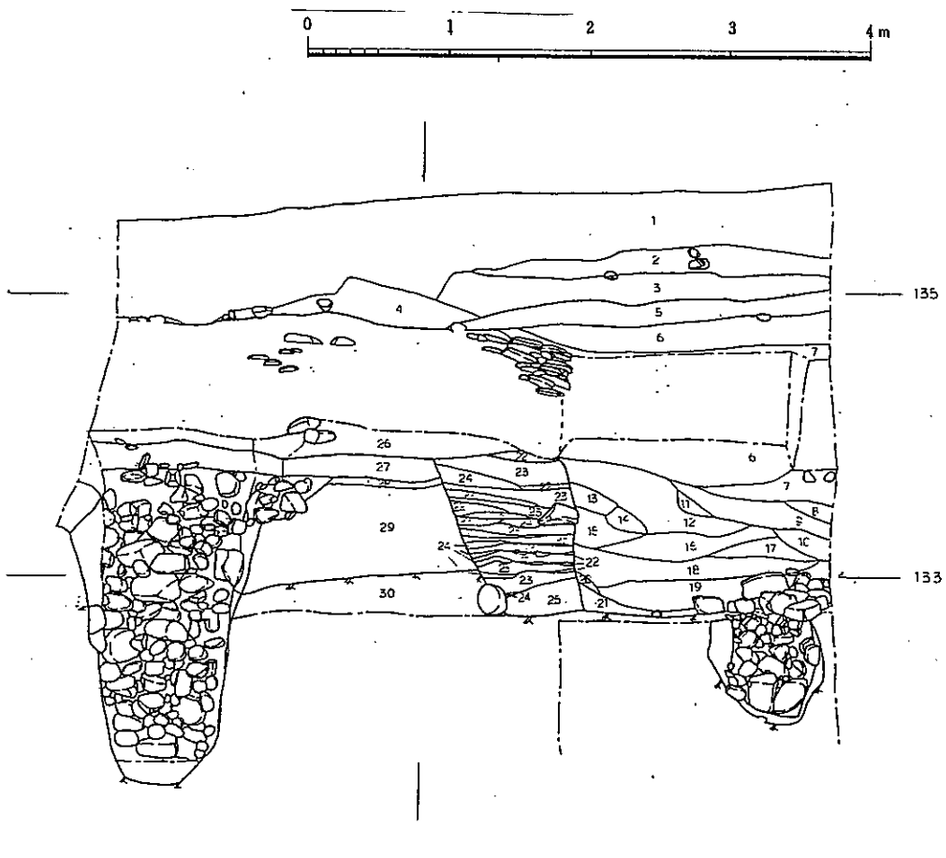
これまで南丘の主体部は、その有無を含めて不明であったが、偶然にもＧトレンチで北丘主体部と同じ構造の墓道、排水溝が検出でき、南丘にも横穴式石室が存在することが確実となった。

1　石室

今回の調査で確認できたのは墓道と排水溝のみであり、横穴式石室であること以外は不明であるが、南丘２段目基底部よりやや内側に石室開口部が位置すると推測でき、北丘と同じく奥壁が南丘中心に位置すると仮定すると、推測に推測を重ねることになるが、２段目基底部の半径が１７メートルであることから全長１６メートル前後の石



南丘墓道平面図　　S＝1／50



南丘墓道立面図　　S＝1／50

※新しい堆積土
1 表土
※墳丘盛土の流出土
2 黄褐色砂礫混じり土　10YR5/6
3 褐色土　10YR4/6
4 褐色粘質土　10YR4/4
※墓道の埋土
5 褐色粘質土（少量の砂礫を含む）　10YR4/6
6 褐色粘質土　10YR4/6
7 黄褐色粘質土　10YR5/6
8 にぶい黄褐色シルト　10YR5/4
9 褐色粘質土　10YR4/6
10黄褐色粘質土　2.5Y5/6
11黄褐色粘質土　10YR5/6
12にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4
13にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
14にぶい黄褐色シルト　10YR5/4
15褐色粘質土　10YR4/4
16黄褐色粘質土（少量の炭を含む）　10YR5/6
17黄褐色粘質土　10YR5/6
18明褐色粘質土　7.5YR5/6
19にぶい黄褐色粘質土（少量の炭を含む）　10YR5/4
20褐色粘質土　7.5YR4/6
21にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4
※墓道斜面の土
22にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4
23暗褐色粘質土（炭を含む）　10YR3/3
24黄褐色砂礫混じり土　10YR5/6
25にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
※墳丘盛土
26にぶい黄褐色砂礫混じり土　10YR5/5
27褐色粘質土　10YR4/4
28にぶい黄褐色砂礫混じり土　10YR5/4
29褐色粘質土　10YR4/6
※地山
30明褐色砂礫土　7.5YR5/6

室規模と想定できる。

2　墓道

墓道は上面幅3.1メートル、深さ約1.7メートルと北丘のものに比べて浅く、幅も狭い。断面が確認できたのは西半分であるが、左右対象とすれば断面は逆台形を呈し、底幅は2.7メートルと推定できる。

北丘と同じく斜面に粘質土と砂質土の互層が観察でき、墓道はこの層を切り込むように掘られている。内部も北丘と同じく褐色粘質土で埋め戻されており、北丘と同一構造であるといえる。

また、テラス敷石についても墓道肩部で止まっており、墓道を埋め戻した後の平坦面には敷石は敷かれていない。従って、テラスに敷石を敷く前、古墳築造工程上では同一時期に南北両丘の墓道が掘削され、さらに両石室についても同一工程上で構築されたといえよう。

3　排水溝

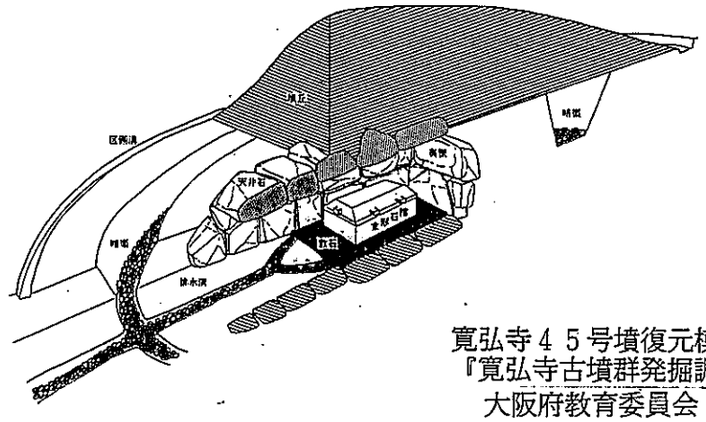
排水溝は墓道のほぼ中央に位置する。幅６０センチメートル、深さ７０センチメートルを測り、断面はU字形を呈する。底には３０センチメートル程度の石を置き、その上は5から２０センチメートルの石で充填している。さらに、その上には２０から４０センチメートルの石を置き、蓋石としている。

4　墳丘内暗渠

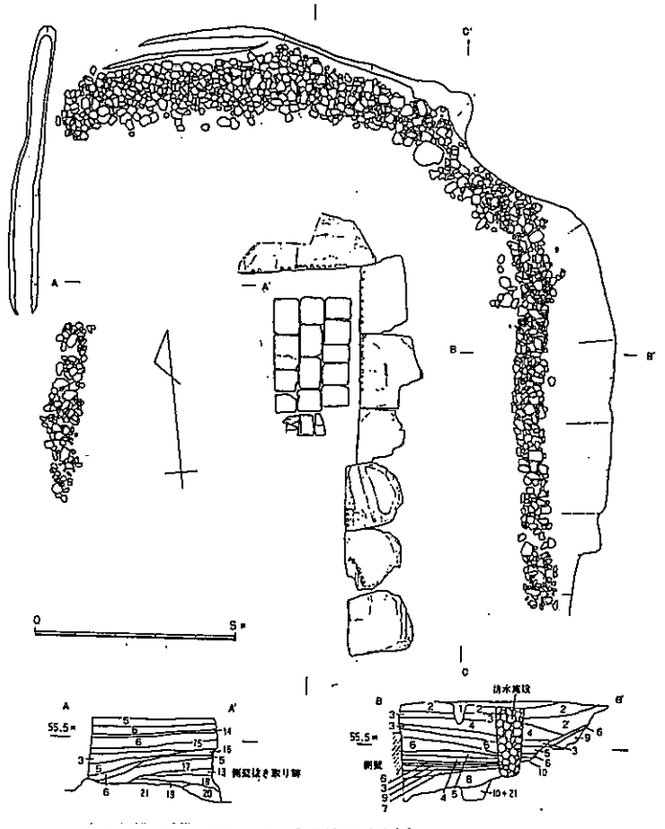
墓道の西側、墳丘裾が削られた部分の断面で石の集積が確認できた。この石の集積は、当初南丘墳頂部と同様の攪乱壙に石が掘り込まれたものと考え、石を取り除いていったところ、盛土の下にもぐっていき、下部は地山を掘り込んでいることが判明した。石の集積は、断面U字形を呈し、上面幅約1.2メートル、深さは2.3メートルを測る。

奥はどこまでつづくか不明であり、東側も確認されていないが、この石の集積は石室を取り囲むように墳丘内に巡らされた、排水のための暗渠と考えておきたい。墳丘

内暗渠は河南町寛弘寺古墳群２号墳、同４５号墳、柏原市平尾山古墳群安堂第６支群３号墳など終末期の古墳で数例確認されている。金山古墳の墳丘内暗渠は、平尾山古墳群安堂第６支群３号墳のものに形状が酷似する。



寛弘寺４５号墳復元模式図
『寛弘寺古墳群発掘調査概要・Ⅷ』
大阪府教育委員会 1989



平尾山古墳群安堂第６支群３号墳
『高井田遺跡Ⅰ』　柏原市教育委員会 1986

第４章　　まとめ

今回の調査では、金山古墳の全容を明らかにすることができ、当初目的以上の成果をおさめることができた。調査で確認されたことをまとめてみると次のようになる。

①くびれ部張り出し出土の土器、昭和２１年の調査時に石室内から出土した土器や石棺の形式から金山古墳が築造されたのは６世紀末から７世紀初頭である。

②墳丘規模を縮小する時期にあって、墳長８５.8メートルを測り、周囲に濠をめぐらしている。周濠を含めた主軸長は１０４メートルと推定できる。

③南北両丘は、二つの円墳を近接して築いたものではなく、当初から双円形に築き、同一の濠で囲む計画性をもっていた。

④南丘は３段、北丘は２段に築かれ、墓道を埋戻した部分を除いて墳丘斜面には葺石はなく、墳丘各段の間の鉢巻き状にめぐる平坦面には敷石を施している。

⑤北丘石室前には、くびれ部へとつづく墓道があり、閉塞施設は墓道から石室入口を覆うように高さ２.5メートル以上に積まれた巨大な構造物であった。

⑥墓道は埋葬終了後、埋め戻され墳丘を整形している。くびれ部では墓道を埋め戻した斜面に葺石が施されていた。

⑦南丘で北丘と同じ構造の墓道、排水溝が発見されたことにより、従来不明であった南丘にも南南西に開口する横穴式石室が存在することが確認された。両石室は古墳築造工程上では同時に築かれている。また、南丘石室周囲には墳丘内暗渠がめぐらされていた可能性がある。

金山古墳は、大小二つの円丘を連接させた形に築かれた、わが国では極めて類例の少ない双円墳で、石棺の形式や出土遺物から６世紀末から７世紀初頭に築かれたと考えられる。畿内で前方後円墳の造営がほぼ終了する時期にあって、墳長８５.8メートルで周囲に濠をめぐらせており、この時期に限れば大古墳といえよう。

南北両丘には横穴式石室が築かれている。南丘石室の規模は調査では明らかにしえなかったが、１６メートル前後の石室規模と想定できる。また、北丘石室には２個の刳り抜き式家形石棺が置かれていることから、南丘石室の内容を類推することができよう。一つの石室に２個の刳り抜き式家形石棺をおさめる例は少なく、しかもこのような石室が二つ存在することは、先の墳丘規模とあわせて被葬者の力の大きさを物語るといえる。